
ひとめぼれ

Y U I K A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとめぼれ

【Nコード】

N2459Z

【作者名】

YUIKA

【あらすじ】

普通すぎる女子高生みあ。

男には興味がなかったはずなのに

一瞬目が合っただけのはずのヤンキー秋斗に興味を抱き・・・

キミの瞳。 - みあside -

私、須藤みあはすごく普通の女子高生。

んゝどれ位かって言うとなんゝ

え？こんなに普通な人居たんだ。

って感じかな（笑）

「ふああゝ．．．ん．．え?!」

うん。もうお分かりだろう。

私はたった今遅刻をした。

え？なんでたった今かって？

それはただ今、8：40。

学校ではちょうど担任が「席につきなさい」なんて誰も聞いてないこと言ってる頃だな．．うん。

遅刻してしまつたらもう慌てたりしない。

だつて無駄じゃん!!（笑）

「悠おはよゝ．．。」

「おはよ．．．ってお前まだ行つてなかったの?!」

「寝坊したのさ（笑）」

「したのさ、ぢやねーし！送つてつてやるから早く準備しろよ。」

悠は5歳年上のお兄ちゃん。

いまは21歳．．かな？

「はあゝい。」

ちよつと年が離れてるからかな？

悠は私に甘い。

見た目いかついのになんか面白い。

「悠、準備万端です!!」

「お前さ、髪どんだけ頑張っても無駄だって。」

「あ、悠、今から車の免許もらって来て。」

「イヤ、無茶言っな。」「はい。」

悠はバイクの免許しか持ってない。

ヘルメットかぶるし、風で巻きもとれるし、

うん、私の30分はなんだったんだろう。

「お前落ちんなよ?」「もう慣れたで大丈夫。」

絶対近所迷惑だろうな、って音を出して走り出した。

着いた。でも授業中に教室に入るのだけは避けたい。

でも悠の瞳は、今すぐ教室行け。って言ってる。

「ありがとね。い、行つてきまゝす。」

悠はまたすごい音を出して去っていった。

うわあ、いろいろな教室からバイク音を聞いた生徒が

物珍しそうにこつちを見ている。

・・・さあ、どこで時間を潰そう・・・。(泣)

かと言つて、そんなに時間があるわけではない。

「はあ、なんで送ってくれるのに起こしてくれないんだろう・・・。」

悠への不満をつぶやきながら近くの公園まで歩いた。

公園の自動販売機でお茶を買った。

ベンチに座ってお茶を一口飲んだ。

「暑いなあ。」

もう7月だ。

部活もやってないし、特に趣味とかなないから土日はほとんど時間の感覚がない。

そのせいか、高校に入学してから時間の経過がとても早く感じる。夏休みもあと少しのときまで来ている。

そろそろ彼氏も欲しい季節だな・・・。

夏祭りも花火も海も、友達とだって楽しいよ？
でも、やっぱり彼氏と見たい年頃なのさ（笑）

「そろそろ行くかな。」

遅刻した時って教室に向かう足がすっごい重い。
教室に入ったときのみんなの視線を考えると、
こころなしに頭が痛くなってきた・・・

なにを思っても進み続けた足は教室までつれてってくれた。

「ふう〜！」

放課でざわめいているはずの教室はこんな日に限って
わりと静かだった。

ガラガラッ

思い切って勢いよくドアを開けた。

「みあ〜遅いよ〜」

「ごめん〜寝坊した（笑）」

杉山桃花は高校で一番最初にできた友達で、
すんごくかわいい。

容姿もだけど、とにかく天然なことか仕草とかth a女の子っ
て感じだね。

「みあ偉いねえ〜千晴なら絶対休んでる！」

イヤイヤ、自慢することじゃない。

峰千晴は中学校からの友達。

口下手で、のわりに思ったことは誰にでもぼんぼん言う。

顔立ちがきれいなんだけど、その性格のせいで千晴をよく思う人
は少ないけど、

友達を絶対に裏切らない。そんな千晴が大好き。

「みあ〜今日悠くんに送ってもらったんだね〜いいな〜。」

桃花は悠のことが好きらしい。

私的には気まずいからやめて欲しいんだけどね。

「あんまよくないよ〜髪かなりひさん（泣）」

「ホントだ！みあの髪おもしろい！」
なんて話してたら授業開始のチャイムが鳴った。

私の席は窓側の後ろから2番目。

お気に入りの席。なんでって、退屈しないから。
外を見れば空もあるし、グランドも見える。

人間観察が好きな私には、特等席。

「．．．いいか？テストの範囲今のうちに言っとくからな？」
やる気のない先生の声はもう聞き飽きた。

「はあ．．．．．」

あ、誰か登校してきた。

誰だろう．．？先輩かな？

制服を着崩しているはずなのに、みつともないと言っよりかっこいい。

髪．．きれいな金色．．。

．．．って、あれ？校則で髪って染めちゃだめって．．

あ、ヤンキーなんだ。

そう思ったとき、目が合ってしまった。

こう言うときの人間の反射神経ってすごいよね。

気づかれたか気づかれなかったか分かんないけど、

目が合ったのは一瞬だった。

でも私の脳裏には強くて鋭くて、どこか寂しそうな目が残っていた。

私は初めて男の人に興味がわいた。

「きりっつ。 礼。」

いつのまにか授業は終わっていた。

千晴は彼氏と弁当を食べるのでこの時間は桃花と2人きり。

「おつ弁当っおつ弁当っ」

桃花あの人のこと知ってるかな？

「てかさ、この学校の金色の髪の怖い感じの人。」

「真田秋斗先輩？」

「・・・やっぱ有名なのか。」

「秋斗先輩がどうしたの？」

「いや、さつき目が合ったただだよ。」

「秋斗先輩イケメンなのに彼女作らないんだよっカッコイイ！」

「へえっ」

確かに整った顔してたな。

んまあ、私には関係ないけどね。

帰りのSTが終わり、桃花と千晴と帰ろうとしたら担任に呼び止められた。

「みあっちょっとおいでっ？」

なんか悪いことした？！・・・あ、今朝のことか。

2人には「ごめん、先帰っていいよ！」と言い残して担任のところに走った。

遅刻の理由とか、バイクの持ち主は誰か、とかいろいろ聞かれた。でも全部話したら「次はもっと静かに来なさいよっ」とだけ言わ

れて、

とくに叱られはしなかった。

その代わりに掃除やらなんやら雑用をかなりやらされた。

ふと時計を見ると7：43をさしていた。

「暗いし．．。」

ケータイを見ると何件か着信があった。見なくてもわかる。
120%悠だ。

「帰ろ．．。」

かばんを持って誰もいない廊下を歩いた。

少し暗いだけなのに昼間と全く違う場所のように思えた。

「せんせえゝかえりまあす。」

とだけ職員室に声をかけ昇降口に向かった。

暗い夜道は嫌いじゃない。

昔っから暗いところ狭いところは好きだった。

だから昼間よりも好きなくらい。

「帰ったら悠に叱られるな．．。」

悠は私の親代わり。のつもりで私をいつも守ってくれる。

もうそんな年ぢやないんだけどね？（笑）

でもすごく感謝してる。

ママは私がまだ小3ぐらいで家を出ていった。

ママが出ていった原因は仕事でなかなか家に帰って来ない。

仕事って言うのも嘘か本当かわかんないんだけどね。

「はあ．．．。」

私の住んでる町に一つだけあるゲーセン。

昼間は安全なんだよ？

だけど夜にはヤンキーのたまり場になる。

今日だって．．．5、6人くらいのヤンキーがたまってる。

こう言う時はなるべく存在感消すのが1番！

早足で通り抜けようとした。「ね〜ね〜。」

ビクッ！

お、おかしいな．．．？今日の運勢2位のはずなのに．．．。

「あ．．．はい？」

．．ん？この人どつかで見たことがある気が．．．

「やつぱみあちゃん！」

「え？」

誰だっけ．．．？

「え？つてまさか忘れられてる？！同じクラスなのにな〜」

同じクラス．．．？．．．．．！！！！

「あ！新崎一輝くん？」

「そ〜だよ〜！忘れんなよ〜」

「ご、ごめんね？」

「ぜ〜んぜん！てか今帰り？」

「え？あ、うん！」

早く帰らないと悠が．．．

「一輝〜誰だよその子〜」

ヤンキーの集団が冷やかしてくる。

その中に1人黙ってタバコ吸っている知ってる顔があった。

明るくて艶のある金色の髪。

整った鼻、口。

どこか忘れられない瞳。

．．．秋斗先輩だ。

「み〜あ〜？どした？」

あ、いけないいけない！

「ゴメンね？私門限あるから帰るね！」

気づいたら一輝くんにそう言って走り出してた。

門限なんてとつくにすぎてるのに・・・。

「ただい・・・。」

「おかえり。」

「げっ！悠・・・。」

「どこほつつき歩いてた？」

「ちがうからね？悠のせいで担任に雑用させられてたの。」

「人のせいにするなよ。」

「悠のポンコツバイクがうるさいから注意されたんです。」

「元はといえばお前の寝坊が悪い。」

「う・・・。」

「明日からは気をつけます・・・。」

「飯できてるから、着替えて降りて来いよ。」

「はい。」

悠のごはんとか久しぶりだな。

いつもは私がごはんを作っている。

でもたまに私の帰りが遅いときとかは悠が作ってくれる。

あんまり上手とはいえないけど、私は昔っから悠の料理が好き。

作るのはいつもカレーだけどね（笑）

「今日もおいしい！」

悠は照れくさそうに私から目をそらした。

食べ終わって部屋に戻ってケータイを開くとメールが来てた。

『みあ〜（^^）／／』

一輝くんからだった。

あ、私アドレス教えてたんだ。

『どうしたの？』

『ちよつと会わない間に可愛くなつたね。』

こんなに分かりやすいお世辞なんてないと思う。

『そんなことないよ（泣）』

『てかさ、みあ彼氏いんの？』

彼氏って言葉を聞いてなぜか秋斗先輩を思い出した。

『いるわけないよ』（泣）』

『そうなんだ〜！ぢゃあさ、俺と付き合わない？（笑）』

ん？ヤンキーってこう言う冗談よく言うのかな？

『冗談やめてよー！（笑）』

『冗談じゃないよ？俺、みあが好き。』

思考回路がグチャグチャだ・・・

なのにまた頭には秋斗先輩が浮かんだ。

『返事は今すぐじゃなくていいから。』

そうメールは続いていた。

私は気まずくってメールをかえせないまま次の日を迎えた・・・。

「．．．だりい。」

つか、眠みい。

「昨日ちよつと騒ぎすぎたな。」

学校なんて行く気はなかった。

星矢からしつこくメールが来なかったら

今頃俺は家でテレビでも見てる。

うるさい親は俺にはいない。だから楽。

『秋ちゃゝん！おはよ♪星矢くん、秋ちゃんを待つてるから〜！』

『秋ちゃゝん！まだ〜？早く学校きてよ〜！』

『秋ちゃゝん．．．僕寂しい．．．』

朝っぱらから何件返信の来ないメールしてんだよ。

どんだけ暇なんだよ。

星矢とは物心ついた頃からずっと一緒にいた。

どんだけウザい事してきても、

こいつは俺の大事な連れだ。

世間のやつらは俺たちを偏見の眼差しでしか見ない。

それは仕方ないことなのかもしれない。

一般的に言う俺たちは“ヤンキー”だから。

普通のやつらは近寄ろうともしない。

親だつてそうだった。

だから一人暮らしを始めた。

センコーだつて俺らにはなんも言つては来ない。

ありがたいつちゃありがたい。

校門の前に着いた。

星矢に『来た。』とだけメールをして校舎に向かい歩いた。改めて校舎を見て思った。ぼろいな。てか汚ねえ。ある一つの窓で視線が止まった。

誰かがこっちを見てる。

黒い綺麗な髪をした女だ。

肌がすげえ白い。

その女はめが合った瞬間はつとしたようにそらした。なんか、気になる。

その気持ちのまま星矢達の待つ屋上へ向かった。

「秋ちゃ〜ん！！やつと来てくれたね〜！」

「お前、秋ちゃんって誰だよ。」

「秋ちゃんは秋ちゃんでしょ〜？」

こいつ、ふざけてるな。

俺は軽く星矢を殴った。

「秋斗遅えーよ。」

この日は珍しく恭介も来ていた。

「お前が来てるなんて珍しいな。」

「今日たまたま暇だったんだよ。」

こいつは女遊びばっかししてる。

朝も夜も平日も休日も関係ねえ。

ずっとだ。

「お前が女絶やすなんて珍しいな。」

「そんなんじゃないよ。」

「恭ちゃんは五股がばれて、今日予定していた女の子にビンタされたんだって！」

自業自得だな。俺は涙が出るくらい笑ってやった。

「今日このあと一輝たち呼んで遊びにいくよ．．．」
またか。

遊びに行くって、どうせあそこしかねえんだろ。

「ゲーセンにー!」

やっぱりな。

「俺はパス。」

こういうのは早めに断つとくが一番。

断るのは直前になるにつれてめんどくなる。

「秋ちゃん。今日断るのは許さねえよん?」

は?今日はって．．あゝ今日は星矢の誕生日か。

「わかったわかった。」

自分の誕生日を自分で率先して祝うのはどうかと思うがな。

そのまま屋上で少し星矢達とばか笑いしながら時間を潰して、
ゲーセンに向かうことにした。

ゲーセンに着き、テキトーに遊んでたら一輝たちが来た。

「星矢くん遅れてすいませんッ」

一輝は中学からの2コ下の後輩。

「おせえーよー!」

一応同じ高校けどこいつはバイトばっかで本当に見ない。

「すいませんッ今日もバイトで．．」

こいつはチャラけてはいるが、礼儀もなってる。

すげえいいやつだと思う。

星矢にペコペコしてる一輝を笑いながら外に出た。

とくにすることもねえ。

座ってたばこを取り出して火を付けた。

もう暗くなってきた。

「あ!」

急に一輝が立ち上がり一人の女のもとに走っていった。
何話してんのかは聞こえねえ。

でもゲーセンの電飾で照らされた女の顔には見覚えがあった。
今日目が合った女だ。

困ったような戸惑ったような女の顔にトクンと胸が鳴った。
周りのやつらはひゅーひゅーとか言って冷やかしている。

一輝の女なのか？

あれ．．．？俺、なんで嫉妬してんだ？
するとまた一瞬女と目が会った。

透き通るような白い肌。

ピンクの小さい唇。

すぐ折れちまいそうな腕。

包めそうな小さい体。

そして黒く艶のある髪。

女は目をそらすと走って行ってしまった。

俺、そんな怖いか？

一輝はその女を見送って戻って来た。

星矢がニコニコしながら一樹に聞いた。

「あのコ誰だよぉ〜？」

一輝は少し顔を赤くした。

やっぱ、付き合ってたのか？

「そーゆうんじゃないですよ？高校のクラスメイトです。」

．．．あれ？俺、安心してる？

「でも．．．．」

そのまま一輝は続けた。

「こんなにかっこ悪いんですけど、俺、アイツのこと好きなんです。」

┐

周りのやつらは一輝を冷やかし続けた。

俺はそれでもあの女のことしか頭になかった。

俺、がらにもなく一目惚れしたのか？

「んで、あのコ名前なんて言うんだよ。」

「みあです。須藤みあ。」

みあ・・・。

「悪い。俺帰るわ。あ、星矢、誕生日おめでと。」

そのまま俺は家に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459z/>

ひとめぼれ

2011年12月10日20時58分発行